

人文学部における 研究と学びについて

人文学部にはどんな先生がいるの？
どんな授業をしているの？ どうして今の研究テーマを選んだの？

人文学部における学びと研究について、教員からの寄稿を通じてご紹介します。
また、人文学部独自のインターンシップ・プログラムについて、
3つのプログラム概要を説明しています。

大学での研究・学びとは

英米文化学科の柴田 崇教授が、
「メディア研究の現在」について語る

インターンシップ・プログラム



鶴雅観光人材
養成講座



クナウパブリッシング
インターンシップ



クナウパブリッシング×
中川町インターンシップ

大学での研究・学びとは

人文学部英米文化学科 教授

柴田 崇



写真①：近影（2023年4月）

担当科目

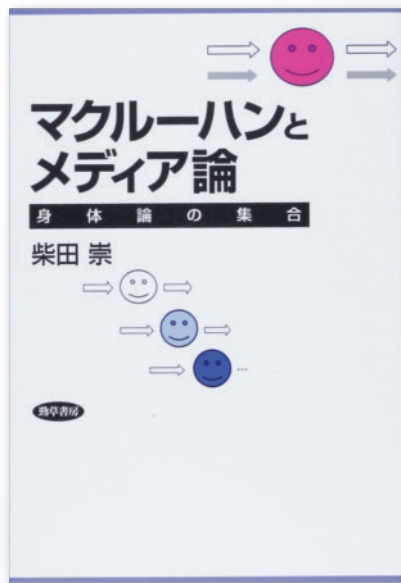
- 1年生「人文学基礎演習」（隔年）：大学での学びのスキルを身につける
- 2年生「人文学演習」：テキストを読む初歩の力を訓練する
- 2～4年生「メディア史」：ことばに始まるメディアの歴史を概観する
- 3～4年生「現代メディア論」：プロパガンダを読み解く力をつける
- 3～4年生「英米文化専門演習」：テクノロジーに関する専門書を精読する
- 4年生「卒業研究」：各自のテーマで卒業論文を作成する

メディア研究の現在

現在（2023年夏）も続く、いわゆるウクライナ戦争のニュースを目にすると、時折、30年以上前の湾岸戦争（1990～91年）の光景がよみがえります。私がメディアについて勉強を始めてから今に至る道筋を追体験してもらいながら、「メディア研究の現在」の一端を紹介することにしましょう。

湾岸戦争を象徴するのが、はるか上空からピンポイントで標的を破壊するイメージです。湾岸戦争が「TV War」や「Nintendo War」などと呼ばれたのは、この無機質な映像をテレビで視聴することで現実世界の戦争がまるで仮想世界のゲームのように感じられてしまったからに他なりません。そして、ウクライナ戦争でもまた、このようなイメージが流れるたびに死の臭いが漂白され、戦争を他人ごとにしてしまう空気が醸し出されているのです。

テレビというメディアを経ることで現実世界の意味はどのように変わってしまうのでしょうか。テレビに特有の効果を明らかにするには、別の何かと比較しなければなりません。映画や写真など、同じくイメージをつくり出すメディアがその候補として真っ先に思い浮かびますが、戦争報道の観点からすれば、新聞やラジオも排除できません。もちろん、メディアを経ない「生の」経験と比較することもできるでしょう。では、「生の」経験とは、どのような経験なのでしょう。何ものにも媒介されない経験を指すとすれば、実は、人間にはそのような経験はもはや不可能なので



写真②：柴田 崇
『マクルーハンと
メディア論』
勁草書房、2013年

す。というのも、ことばを使い始めて以来、人類と世界の間には常に何らかの媒介物があったからです。人類は、ことばを皮切りにして無数の人工物をつくり出しては世界と自らの間に媒介させ、そのたびに自らの経験を改変してきたのです。テレビの特性を理解するには、テレビ以外の膨大な数の媒介物との比較とともに、人類史のレベルの長い時間軸で考えなければならないようです。

ここまでの話で、少なくとも、メディアを使うことが私たちの経験に大きな影響を与える点には納得してもらえたのではないのでしょうか。この当たり前の点も、今から 70



写真③：柴田 崇
『サイボーグ』
東京大学出版会、
2022年

年ほど前には当たり前ではありませんでした。「メディアは経験を媒介するかもしれないが、何かを経験するときメディアは透明になるので無視してよい」という考えの方が一般的だったのです。「メディアというコミュニケーションの形式よりも、内容の方が重要だ」とも言い換えられるでしょう。「話し方よりも、話す内容の方が重要だ」と、さらに言い換えてみるとどうでしょう。こちらの考えの方が妥当のように思えてきませんか。こうした通念、つまり、「内容>形式」の不等式を支持する手ごわい通念に挑み、「内容<形式」の正当性を指摘したのが、マーシャル・マクルーハン（1911～1980）というカナダの研究者です。マクルーハンとは、人々のコミュニケーションではメディアこそが重要な役割を果たしていることに人々の注意を向け、今日のメディア研究の礎を築いた人物です。ことばを含め、人類がつくりだしたもののすべてをメディアと捉え、それらが使用者に及ぼす影響を考えるべきことを説きました。この考えを集約したのが、マクルーハンの代名詞とも言える「メディアこそがメッセージ（The medium is the message.）」の命題です。

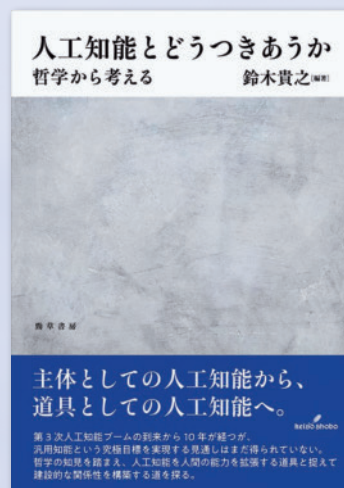
湾岸戦争への疑問から出発してずいぶん遠くに来てしまいました。テレビの話はどこに行ったのかな、と思う人もいることでしょう。しかし、テレビについて理解しようとすればするほどテレビそのものは視界から消え、テレビの背後にあるものが前面に出てくる、これが、皆さんに伝えたい私自身の経験です。戦争や貧困などの社会現象についても同様のはずです。それらを理解しようとすればするほど背景の知識や、説明のための理論の必要性に気づくものです。「理論」と聞くと難しそうですが、見えなかったものを見えるようにしてくれる知識のまとめ、と置き換えてみるとどうでしょう。この意味での理論なら、文字通りの理論書に留まらず、評論や小説を読んでも見つかることが

あります。理論は私たちの世界を広げてくれるアイテムです。私にとっては、マクルーハンのメディア論が知的冒険のためのアイテムだったわけです。

マクルーハンを勉強し始めてからだいたい10年くらいで学位（博士号）を取り、それから5年後の2013年にマクルーハンについての本を出しました（写真②：『マクルーハンとメディア論』）。タイトルを「マクルーハンのメディア論」ではなく「マクルーハンとメディア論」としたのは、マクルーハンの理論を紹介する地点に留まらず、マクルーハンが生み出したメディア論を、生みの親の所有物ではない一つの自立した存在として独り立ちさせることをねらったからです。昨年出した本では、もはや親の名前とともに語られる必要のなくなった理論を使って世界を探索した成果をまとめました（写真③：『サイボーグ』）。「サイボーグ」と聞くとSFの話と思うかもしれませんが、この本では、体に埋め込んでいるか否かにかかわらず、人工物を使う人間がもはやサイボーグであることを明らかにしました。近影（写真①）は、人文学部主催の「人文学の挑戦」というイベントでこの本を紹介したときのものです。ことばを使い始めて以来、人間はサイボーグだったのです。そして、AIを使いこなす現代人ももちろんサイボーグです。他方、AIについては、人間に使われる道具ではなく、人間と同様の独立した主体と見做すべきとする立場もあります。二つの立場のいずれが正しいか、ではなく、二つの立場が実は同根であることを、この夏に出た本（写真④：『人工知能とどうつきあうか』）の中で解明しました。

湾岸戦争から遙か遠くに来てしまいましたが、今いる世界が、あの疑問を抱いた世界と地続きであることは間違いありません。

世界には訪れるべき場所があり、会うべき人がいて、読むべき本があります。大学時代に忘れたい出会いがあることを祈念します。



写真④：鈴木貴之編
『人工知能とどうつきあうか』
勁草書房、2023年

インターンシップで 自分の **キャリア** を 見つけよう 🔍



人文学部では、キャリア支援の一環として人文学部生のみを対象にした、独自のインターンシップ・プログラムを設けています。人文学部生の中でとくに就職希望の多い観光業界や出版業界、公務員の仕事を体験できたり、これらの仕事に従事するプロフェッショナルと一緒にプロジェクトを動かしたりできます。また、どのプログラムも、専門教育科目「インターンシップ」(2年次開講、1単位)の単位認定を申請するための条件を満たしています。以下、3つのプログラムの概要を紹介します。なお、ヒューマン15号と17号には、プログラム参加者のインタビューや体験記が掲載されていますので、そちらも是非ご覧ください。

1 鶴雅観光人材養成講座

鶴雅リゾート株式会社の阿寒湖畔施設に宿泊し、北海道観光を牽引する産官学の各界の講師による講義、およびホテルでの現場実習を通じて、観光関連企業でリーダーとして活躍するための基本スキルを習得します。北海道の課題を広く理解できる点で、観光業界はもとより、道内の自治体や企業への就職を考えている人にも役立つ講座です。同講座には本学以外に毎年、小樽商科、立教、札幌国際、北海道文教、札幌大の学生が参加し、14日間という長期間にわたって寝食を共にしつつ、北海道観光全般を見通す内容の座学(23講座)と、自然体験メニューやアイヌ文化を体験するナイトウォークといった実践的な現場実習に取り組みます。



北海道各地の魅力を全国に発信する『スロウ』誌や、AIRDOの機内誌の編集をはじめ、印刷、出版、広告マーケティング、webデザイン部門、セレクトショップを擁する総合印刷会社、株式会社クナウパブリッシング(ソーゴー印刷株式会社が2022年6月より社名変更)の帯広本社にて5日間、雑誌や冊子の企画、取材、編集作業等を体験します。誌面構成力・文章表現の力を実践的に磨き、地域と関わり合いながら編集者のキャリア形成のための基本スキルを習得します。

クナウパブリッシングインターンシップ 🔍

3 クナウパブリッシング (Slow Travel Hokkaido) × 中川町インターンシップ

株式会社クナウパブリッシングと中川町(上川総合振興局管内)とともに、「地域の魅力を捉え直し、新たな文化・産業・観光を振興するプログラム作り」をテーマに、中川町が直面する地域課題を解決するためのミッションに取り組む、課題解決型インターンシップです。5~10日間中川町に実際に滞在し、町職員や観光協会、地域おこし協力隊の方々と、地域イベントでの出展内容を考案してディスプレイの制作等を担当したり、森林、工芸等の、道内各地に眠った観光資源を発掘したり、中川町内の観光拠点における未活用スペースの利活用方法を企画・運用したりします。



文化を学ぶ 世界と繋がる



北海学園大学人文学部

日本文化学科(1部・2部) / 英米文化学科(1部・2部)

